

会寧高等女学校について：在朝鮮「内地人」学校の事例研究

稲葉， 継雄
九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門：教授

<https://doi.org/10.15017/7374765>

出版情報：国際教育文化研究. 8, pp.1-17, 2008-06-30. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



会寧高等女学校について

－在朝鮮「内地人」学校の事例研究－

稲葉 継雄

はじめに

会寧は、朝鮮半島の北端の、豆満江を挟んで満州と境を接する小さな町（邑）であった。しかし、日本にとっては軍事上の要衝で、1915年歩兵第75連隊が駐屯したのを皮切りに、同年工兵第19大隊（1936年連隊に改組）、1937年飛行第9連隊、1938年野戦重砲兵第15連隊と高射砲兵第5連隊が置かれるなど「軍都」の態勢を整えていった。

会寧高等女学校は、1937年4月に開設された。1920年6月の羅南、1926年4月の清津に続く咸鏡北道第3の高等女学校として地域住民の衆望を担って登場したのであったが、気候の厳しい内陸部（すべての在朝鮮「内地人」中等学校の中で最北端）に位置し、各学年1クラスしかない小規模校であった。1938年3月、大田中学校の教頭であった亀田喜三郎が会寧高等女学校の第2代（専任としては初代）校長として赴任したが、その人事は、教頭から校長への昇任であったにも拘らず「左遷」と見られたほどであった。

しかし、会寧高等女学校には、軍都会寧の女学校であったが故の、また、当初から名実ともに「内鮮共学」の学校であったが故の独特な学校文化があった。本稿は、会寧高等女学校の沿革を描くとともに、その学校文化の特色を明らかにすることを狙いとする。

主たる資料は、1973年から99年にかけて発行された会寧公立高等女学校同窓会会報（会寧高女同窓会誌）『ひまわり』全15冊である。文献で不明なところは、福岡・佐賀県在住者を中心とする同窓会員との面接や電話インタビューによって補足した。

一．学校沿革

会寧高等女学校創立の動きが具体化したのは、1936年の春ごろだったようである。後に会寧高等女学校開校時の専任教諭となる加藤浄が、同年4月、羅南尋常高等小学校の嘱託となるに際して咸鏡北道視学官一瀬克巳から、「小学校で一年程勉強して欲しい。その中に中等学校が出来る」¹⁾と言われている。

ところで咸鏡北道には、韓国併合直後に3つの学校組合が設立されていた。1911年2月の

清津、同年 3 月の羅南、1912 年 4 月の会寧がそれである。これらの学校組合は、いずれも 1912 年 4 月開校の 3 小学校の運営母体として組織されたものであるが、このうち羅南学校組合は 1920 年 6 月に、清津学校組合は 1926 年 4 月に高等女学校も運営するようになった。高等女学校の経営に関して、ひとり会寧だけが取り残されていたのである。その原因は、教育財政負担力の差にあった。1931 年当時の資料によれば、小学校と高等女学校を運営する清津学校組合が戸数 2,062、1 戸当り平均賦課金 23.00 円、羅南学校組合が戸数 1,480、1 戸当り平均賦課金 20.16 円であったのに対して、会寧学校組合は、戸数 695 で、小学校しか持たないにも拘らず 1 戸当り平均賦課金は、清津・羅南より多い 28.50 円だったのである。²⁾

しかし、1931 年 9 月の満州事変後、会寧は軍都（会寧高等女学校校歌で謳うところの「つわものの屯^{たむろ}の都」）の色彩を濃くしつつ人口が増大し、並行して高等女学校待望論が、官民を挙げて高まった。特徴的なのは、高級将校には家族帯同者が多く、軍も「女学校創設を前々から希望して」³⁾いたことである。

1937 年 4 月、会寧高等女学校は、公立（学校組合立）、4 年制、各学年 1 学級、内鮮共学の女学校として発足した。高等女学校の修業年限については、日本内地と同様朝鮮でも、大都市では 5 年制、小都市では 4 年制という区別が成立していた。ちなみに 1934 年当時、5 年制は京城第一・京城第二・大田・大邱・釜山・馬山・新義州・元山・咸興の 9 校、残りの 17 校が 4 年制であった。しかし、このころから 5 年制高女を 4 年制に還元しようとする動きがあった。1936 年 3 月の状況は次のとおりで、このような流れからすれば、新設の会寧高等女学校は 4 年制とするのが自然であった。

鮮内に於ても平壤鎮南浦仁川群山木浦清津大田全州光州の各府女学校は全部四年制にして近時釜山咸興元山に於ても目下頻りに学年の短縮を唱ふるに至れり要するに学年の短縮は經濟問題に伴ひ…⁴⁾

高等女学校における本格的な内鮮共学は、1934 年 4 月「内鮮共学を創設の使命とし」⁵⁾て開設された春川高女を以て嚆矢とする。続いて 1935 年 4 月、金泉高等女学校が設立され、朝鮮総督府は、「内鮮人子弟の共学実施の前提として昨年新設された春川公立高等女学校及本年新設された金泉高等女学校を基調として…（中略）…女学校より自然中等学校に及ぼし実質的に漸進主義を執り其の領域を拡大して全面的共学⁽⁷⁷⁷⁾に実現せしむる方針」⁶⁾を固めた。会寧高等女学校の学級編成は、この総督府方針に沿うものだったのである。加えて会寧には、「日本人の女子だけでは一箇学級を編成するに足らず朝鮮人をも収容することにした」⁷⁾という事情もあった。

1937 年 4 月 20 日、当時会寧邑の公会堂として使用されていた会寧尋常高等小学校の旧校舎で会寧高等女学校の開校式および 1 回生 55 名（内地人 47 名、朝鮮人 8 名）の入学式が挙行された。以後 1 年間、この仮校舎で授業が行なわれ、体操の時間は小学校の運動場を借用した。

開校時の教師陣は、校長渡植彦太郎と教諭萩尾三八・藤沢徹男・大藪静夫・加藤浄・村田道子の 6 名であった。しかし、専任は半分だけで、校長の渡植、英語担当の藤沢、数学担当の大

藪は、会寧商業学校の校長・教諭が本務、会寧高等女学校は兼務であった。また、音楽の指導は、普通学校訓導の応援を得たという。

会寧高等女学校への会寧商業学校側の関与は、教員人事にとどまらなかった。会寧高女第2代校長亀田喜三郎は、渡植夫人について次のように回顧している。

奥様は奈良女子高等師範学校の出身で、夫君の馴れない女学校の経営に対して蔭ながら色々助言なさったようである。会寧高女の制服はそのデザインで、袖の付け方に独得の工夫があって厳寒に肌着を重ねても窮屈にならないとのことである。…（中略）…

会寧高女の生徒の胸に輝く校章は、日本婦人を象徴する撫子に軍都を表す剣をあしらったもので、開校と同時に制定されたもの、渡植校長夫人の意匠ではないかと思う。⁸⁾

第2代校長亀田喜三郎は、1938年4月1日に着任した。亀田の学校経営を、渡植は次のように評している。

二年目以降は亀田先生が正式の校長として来任され、教員数も増加され、先生の希望の教師も採用されたりして、先生御自身の学校経営の方針から、万事が整備され、ここにしっかりした会寧女学校の校風も確立したわけである。⁹⁾

亀田による教員人事は後に詳述することとし、会寧高等女学校の校風についてみると、亀田は、校風確立のために校歌・校訓を制定した。亀田の校歌作詞は、京城第二高等普通学校（在任1927年2月～1935年5月）の校歌に次いで2度目であった。会寧高等女学校校歌は次のとおりである。

一. 鈴蘭の 香り床しく

楡若葉 陽にかがよいて
なつかしき 学びの園に
うち集う^{すめら} 皇み国の 乙女子我等
等

二. 五国城^{いしがみ} 碑 古りて
擾乱の 夢もはるけし
大御稜威 光仰ぎて
嬉しくも教の道に おり立つ我

三. 図們江 流れさやかに

芙蓉の峰 そばだつあたり
そのかみの^{つたよ} 伝説しのびて
敷島の大和撫子 優しき我等

四. つわものの 屯の都
星冴ゆる 国の境に
雄々しくも 生れ育ちて
愛国の血潮は 胸に高鳴る我等

日中戦争期に入って作詞された校歌らしく、1番から4番まで「皇み国の 乙女子我等」「大

御稜威 光仰ぎて」「敷島の大和撫子」「愛国の血潮は 胸に高鳴る我等」といった天皇制イデオロギー・軍国主義に基づく文句がちりばめられている。

このような校歌の趣旨を集約して、「優しく 賢く 雄々しき 皇国女性たれ」というのが校訓であった。

亀田校長の着任と時を同じくして 1938 年春、豆満江に注ぐ八乙川の川向う、会寧邑の町外れに新校舎が完成した。「当局はこの新校舎に商業を入れ、商業の古校舎に女学校を入れようという計画があった」¹⁰⁾というが、結果的には会寧高女が入居することになった。用務員（当時の言葉で「小使さん」）福山某が広い校地にたくさんの向日葵を植え、学校の名物となった。会寧高等女学校同窓会会報（会誌）の標題『ひまわり』は、これに由来する。

新校舎には移ったものの運動場は未整備であったが、工兵隊の演習の一環としての突貫工事によって、横 150m 縦 60m の大運動場が造成された。亀田校長は、「工兵隊長の令嬢が一年に在学していたので特に好意を寄せられたのである」¹¹⁾と見ている。

1938 年 7 月、張鼓峰事件（ソ満東部国境での日ソ両軍の衝突事件）が起こった。「特に一回生の諸君はほとんど毎日の様に会寧陸軍病院での奉仕作業に従事した。従って授業のない日が幾日もあった」¹²⁾という。

1939 年秋、校歌の一節「敷島の大和撫子 優しき我等」をデザイン化した校旗ができた。同年 4 月会寧高等女学校に着任し、歴史が専門ながら図画も担当していた客殿賢の苦心の作であった。

校旗制作と相前後して、校舎を増築すること、講堂と寄宿舎を新築することが決定された。これを計画し推進したのは亀田喜三郎であったが、亀田は、これら諸事業の完成を見ることなく、1940 年 3 月、羅南高等女学校に転任した。

1940 年 5 月、1 回生（4 年生）の内地修学旅行が行なわれた。「日支事変は始まっていたが、紀元二千六百年の奉祝行事で奈良も京都も沸きたち、東京も華やいでいた」¹³⁾という。

1941 年 12 月 8 日、太平洋戦争に突入し、42 年度以降の内地修学旅行は中止となった。結局、会寧高等女学校の内地修学旅行は、1 回生と 2 回生の 2 度だけに終わったのである。代わりに会寧周辺への 1 泊旅行が行なわれた。

なお、春の遠足は、開校以来全学年が参加して行なわれ、豆満江を渡って満州まで足を伸ばすこともあったが、これまた戦局の進展とともに、月 1 回の「鍛錬行軍」にとって代わられた。1942 年入学の 6 回生は、「学校時代、戦中で旅行なく歩け歩けの行進だった」¹⁴⁾と記憶している。

1943 年秋、図書館が完成した。前年 3 月に会寧高女を卒業したひとり娘（日本名大原静枝）を病気で亡くした朝鮮人の母親が、娘の供養にと学校に寄付したものである。

1945 年 3 月、第 5 回（結果的に最後の）卒業式が挙行され、新年度に入ると、正常な授業はほとんど行なわれなくなった。「飛行場の草刈りに、山の中の弾薬庫に弾磨きに松炭油集めで、勉強等致しませんでした」¹⁵⁾、「私達九回生は、たった一学期間だけの生徒で、それもあけくれ勤労奉仕ばかりで、教室にクラスメート全員揃っての時間はほんの僅かだった。だから、クラスメートの顔も名前も、ろくに覚えていない」¹⁶⁾などの証言がある。

1945 年 8 月 13 日、一時的な避難であって閉校するつもりはない「閉校式」が行なわれた。村岡哲夫校長は、次のように訓示したという。

戦局は愈々緊迫を告げ、今や戦火の恐怖から逃れ難く、我が郷土会寧も亦ソ連軍の一方的進駐によって戦場と化しつつある最悪の時期に直面しました。先に総司令部からの命により、本邑民は内鮮人を不問一応安全地帯へ退去せねばならぬことになりました。学校は本朝を以て一時閉鎖のやむなきに至りここに閉校式を挙げる次第です。ことここに至り暫らく学園を閉じて、師弟互に袖^(ママ)を別つこと感慨無量のものがあります。…(中略)…どうか皆様は各父兄の許にあつて必勝の信念に燃え、しっかりと働いて下さい。戦局は屹度有利に展開し学校の再開の日もあまり遠くないと信じます。

では皆様健康に留意し再開の日を楽しみにしてお別れ致しましょう。17)

8 月 13 日午前 8 時からの閉校式には生徒全員が出席したわけではない。登校中に避難命令が出るかもしれないと、自宅で待機した者も少なくなかったからである。したがって、これに先立つ 1 学期の終業式が、会寧高等女学校の事実上の閉校式だったことになる。

二. 教員の去就

1. 校 長

渡植彦太郎は、1924 年東京商科大学（現 一橋大学）卒で、横浜商業学校（現 横浜市立大学）教諭～京城帝国大学法文学部助手～京城高等商業学校助教授～同教授を務めた学究であった。その渡植が、1935 年 3 月、京城を遠く離れて咸鏡北道会寧の商業学校長となった。当時の京城高商教員間には帝大派と一橋派の抗争があり、渡植の会寧行きはそれが原因であろうと推測されるが、その真偽はともかく、この人事異動が渡植にとって不本意であったことは確かである。1935 年 3 月から 40 年 3 月まで会寧商業学校長としての 5 年間（途中 1937 年度 1 年間、会寧高等女学校長を兼務）を、渡植は次のように総括している。

私にとって会寧五年間の校長生活が悔いのないものであったと言っても、又、それが楽しいものでなかったと言っても嘘になる。未だ三十代半ばで校長と云う老人臭い職を押しつけられたことは、何と言っても迷惑千万の事であり、元々そうした事務的なことが不得手の故に、学問を仕事とする気になった私であるから、尚更途方に暮れた。…(中略)…何と云っても一番勉強盛りの頃を、その勉強を中絶することを余儀なくされた事に、後年私が一人前の学者としてやって行くことの大きな妨げとなった事は否めない。だが、その間に書物を読んでいては到底学び得ない事を、直接、経験から訓えられたことも少なくはなかった。会寧の五年間は、私を本格的な学者とする事を妨げはしたが、どうやら一人前の教育者にはしてくれたらしい。

18)

また渡植は、会寧高等女学校長を兼任したことについて次のように述べている。

当時、新しい中等学校が出来ると、始めの一年は専任校長を置かず、その地の他の中等学校長がこれを兼任した。それで、商業学校長であった私が会寧女学校長を兼任したわけである。

19)

ここでいう「中等学校」には補足が必要である。それは、「始めの一年は専任校長を置か」なかったのは主として高等女学校であって、中学校や高等普通学校（男女とも）ではそんなことはなかったからである。筆者の調査によれば、1937 年度までに開設された朝鮮の高等女学校 29 校中、開設当初専任校長がいなかったのは 10 校にのぼり、当該校の教諭が校長事務取扱を務めるか、近隣校の校長が高等女学校長を兼ねた。

会寧商業学校長の後の渡植は、新義州商業学校長を 1 年間（1940 年度）務めて内地帰還、横浜商業専門学校・福井大学・富山大学・松山商科大学などの教授を歴任した。本来の学究に戻ったわけである。²⁰⁾

会寧高等女学校第 2 代校長亀田喜三郎は、教員として異色の経歴の持ち主である。愛媛県今治の高等小学校を出た後、独学して小学校教員の免許状を取り、18 歳で、今治沖に浮かぶ大三島の小学校の代用教員となった。さらに 23 歳時の 1918 年 10 月、中等教員資格検定に合格し、福井中学校教諭に採用された。朝鮮渡航の契機は詳らかでないが、自らは、「浪漫主義で放浪性の私は玄海を越えて朝鮮に渡」²¹⁾ったと言っている。

亀田は、1927 年 2 月、京城第二高等普通学校教諭となり、1935 年 5 月まで在任した（1934 年 4 月から教頭）。当時の教え子（朝鮮人）は、亀田を次のように評している。

日本人の恩師の中には亀田喜三郎という国語の先生がいらっしゃった。髪を伸ばさずくりくり坊主にし、鼻髭と左目の下の小さな疣と福耳が非常に印象的だった。めったに笑わない謹厳な方であった。高等小学校（小学校 6 年と中学校 2 年）の課程しか出ておらず、豆腐売り、巡査などきつい仕事を経て文検（中学校教員資格考試）、高検（高等学校教員資格、現在の大学教授資格に相当する）にパスした努力家であった。漢文を教えながら深奥な人生哲学もしばしば語る哲学者でもあった。

都の鎮め 北岳の 南 由ある地を占めて

健児八百 うち集ふ 我が学び舎ぞ 聳ゆる

という校歌は、この亀田先生の作詞であり、曲は、淑明女子高普の音楽教師だった金永煥先生が付けられた。²²⁾

8 年余にわたって朝鮮人の京城第二高等普通学校に勤めた亀田喜三郎は、1935 年度 1 学期の途中（5 月 16 日）に内地人の大田中学校に移り、1938 年 3 月末まで一貫して教頭を務めた。そして、この在任末期に咸鏡北道への異動交渉が行なわれたが、当初羅南高等女学校長となる筈であったのが、結局は会寧高等女学校長に落ち着いたその経緯は次のとおりである。

大田中学校の教頭であった私に、親友の咸鏡北道の一ノ瀬^(ママ)克巳視学官から、羅南高等女学校長として来任して欲しいとの招聘があり、私は喜んで承諾の返書を送り、大田中学校長の了解を得、専ら転勤の支度をしていたのであった。ところが三月も末になって、再び一ノ瀬視学官から、

「羅南高女の辻与四郎校長を釜山高女校長に転出させ、貴君をお迎えすることに決定したのであるが、急に釜山の方から『辻校長は兎角の評判があり、その採用は受け入れられない。』と拒絶して来ました。為に貴君を御招きすることが不可能になりました。誠に申し訳なく深くお詫び申し上げます。若し貴殿の御承諾が得られるならば、当道で新設の会寧高等女学校に御来任を懇願致します。」

との急書が来たのである。

私の羅南への転出は皆に知れ渡り、後任も決定していて今更ここに留ることも出来かねる。さりとて会寧は日本中で一番の僻遠酷寒の地、学校は一学年一学級の小さい学校、大田中学校の教頭から転任するのは誰が見ても左遷である。その上に新たに中学に入学した息子と高女三年に進学した四女の転入学する学校が会寧にはない。しかし大田に留れない以上致し方なく会寧高女の就任を承諾したのであった。²³⁾

一瀬克巳は、1925～34 年度、京城第二高等普通学校の教諭であった。すなわち、亀田と一瀬は 7 年（1927～34 年度）にわたって京城第二高普の同僚だったのであり、この間に親友となったようである。一瀬は、1935 年咸鏡北道に異動し、視学官として教育行政の衝に当たっていたのである。

「大田中学校の教頭から転任するのは誰が見ても左遷である」という認識があり、「致し方なく会寧高女の就任を承諾した」亀田であったが、会寧高等女学校初の専任校長として、自らも初任の校長として、同校の経営に情熱を燃やした。具体的には、前述したように校歌・校訓を定めたほか、濱田正行・中西（井上）初枝・片岡（中田）久美らをスカウトして教師陣の充実に努めたのである。渡植彦太郎は、「亀田先生の教育は大きく会寧女学校の教育に影響している。先生のご恩を大きく謝する必要があると思う」²⁴⁾と語っている。

校舎の増築、講堂・寄宿舎の新築工事が進行中であった 1940（昭和 15）年 3 月、亀田は、またしても「やむなく転出を承諾」することになった。会寧高女から羅南高女への転任の経緯は次のとおりである。

昭和十五年の三月になって一ノ瀬視学官から羅南高女に転任してほしいとの依頼があった。

「問題の辻校長をやっと依頼退職させることになったので来任を乞う。学校経営が愈々乱脈になり、軍部方面からも厳重な抗議が来て困りぬいているから是非来て改革を頼む。」

とのことである。

私は新設の会寧高女を引き受けて建設は半ばであり、第一回の卒業生も出さず、折角全力を投下して計画している寄宿舎や特別教室の完成も見届けずに中道で去るのは何とも心外であった。しかし羅南高女は以前のゆきがかかりもあり、やむなく転出を承諾したのであった。²⁵⁾

亀田はその後、1943 年 4 月、忠清北道に移って清州第一中学校長となり、そこで敗戦を迎えた。引揚げ先は、教員としてのスタートを切った地であり、妻の故郷でもある愛媛県大三島であった。

ところで、初代校長渡植彦太郎と第 2 代校長亀田喜三郎には、奇妙に一致する点が多い。渡植の長女紗江子と亀田の 4 女ユカリは、ともに会寧高女 1 回生であったこと（亀田ユカリは 2 学年転入）、最終的に両家族とも愛媛県に定着したこと（渡植が松山、亀田が今治）、歿年も同じで渡植が 1992 年の 4 月（享年 92）、亀田が 5 月（享年 96）だったこと、などである。

第 3 代校長関根十七司は、1923 年から 16 年の長きにわたって大邱中学校教諭を務め、1937 年からの 3 年間は同校教頭であった。会寧高等女学校長としては 1940 年 3 月 30 日から 1945 年 3 月 19 日まで在任し、20 日付で江原道・鉄原高等女学校の校長として転出した。関根は群馬県出身で、同じく群馬出身の教諭関福太郎と、会寧の生まれ育ちではあるが群馬が本籍の塚越龍生の会寧高女在任期間（関は 1940～45 年度、塚越は 1941～45 年度）が関根校長とほぼ一致する点が注目される。これは蓋し、関根の意図が働いた人事である。²⁶⁾

最後の第 4 代校長村岡哲夫は、1945 年 3 月 20 日から僅か 5 ヶ月の在任であった。前職が京城第二高等女学校教諭（在任 1930～44 年度、1943 年から教頭）であったこと以外の情報は、今のところ持ち合わせていない。

上に見たように、亀田喜三郎・関根十七司・村岡哲夫は、いずれも会寧高等女学校で初めて校長となった。会寧高女が、朝鮮半島の最北端に 1937 年に開設された小規模・非伝統校であったことの反映であろう。

2. 教 諭

会寧高等女学校に勤務した教諭のうちユニークな経歴の持ち主を、着任順に何人か紹介しておこう。

萩尾三八は、羅南中学校が前任校で（在任 1928～36 年度）、咸鏡北道随一の名門中等学校羅南中では中堅か、あるいはそのやや下くらいの位置付けであったから、会寧高女での教頭就任は、いわゆる抜擢人事だったと言ってよい。したがって大いに張り切ったであろうことは、次の渡植彦太郎と亀田喜三郎の証言からも窺うことができる。

私（渡植一稲葉註）より、教頭の萩尾さんの方が余程、意気込んでいた。一風変った人柄で、多少奇矯でもあったが、一つの見識を持って、教育に当たっていた。今頃はこうした教育者は稀である。当時でもそんなに居たわけではない。萩尾さんに教えを受けた人達は今でも、氏のいささか、こっけいな風貌を懐しく思い起しているのではないか。手の平療法や按摩のおけいこ等は就中、傑作ではなかったか。²⁷⁾

教頭は羅南中学校から萩尾三八先生が来任せられた。校長が専任でないので校務の大半はこの先生の処理するところであった。熊本県の出身で専門は国語科、朴訥謙虚、誠心誠意の一面

に所謂もっこそ（「もっこす」の誤り—稲葉註）精神の持主であった。²⁸⁾

ちなみに、渡植の言う「按摩のおけいこ」とは、萩尾が、「生徒が将来姑に仕えるためにと按摩の指導を正科に取り入れ」²⁹⁾たものである。

1939年4月、後述するように教頭として小西理明を会寧商業から会寧高女に引き取らざるをえなくなったため、萩尾三八は、この煽りを食って鏡城中学校に転出した。鏡城中で萩尾は、再び平教諭に戻った。

藤沢徹男は、会寧商業学校教諭として1935年から在任していたが、1937年度の1年間、会寧高等女学校教諭を兼ねた。それが機縁となって高女教諭村田道子と結婚することになり、村田は、37年度限りで教職を退いた。

大藪静夫は、1934年から京城男子高等小学校訓導兼京城商業専修学校教諭を務めていたが、1935年11月会寧商業学校教諭となり、1938年度まで在任した（この間、1937年度は会寧高等女学校教諭を兼任）。本人によれば、その後「会寧～山形～新義州～兵隊～南鮮～引揚」³⁰⁾と内鮮間の異動を繰り返している。ちなみに新義州に関しては、「朝鮮総督府官報」に1944年11月16日付で「補新義州公立中学校教諭」³¹⁾という辞令がある。

加藤浄は、1932年官立専門学校を卒業、中等学校教員免許を取得していた。しかし、日本内地には職がなく、朝鮮に渡ることになった。その経緯は次のとおりである。

当時は日本一般に稀に見る不況時代。従って「大学は出たけれど」という言葉が国中に流れている中で我々は右往左往。為すことなく茫然としている者、どんな仕事でもいい一日五十銭八十銭いくらかでもいい何月でも仕事を探し廻った…そう言う時代だった。…（中略）…当時長兄は農林学校卒業。朝鮮半島南部にある植林会社につとめていたが私の苦勞しているのを知って何とか援けて見ようと北鮮にいる友人を訪れ頼んで呉れた。その「友人」は幸いにも道庁につとめる視学官であった。³²⁾

「道庁につとめる視学官」とは、前述の咸鏡北道視学官一瀬克巳である。加藤は、一瀬視学官の肝煎りで1936年4月、羅南尋常高等小学校の嘱託となり、1937年2月、正式に訓導に任命された。そして同年3月、会寧高等女学校教諭となったが、1937年度1年間、藤沢徹男や大藪静夫とは逆に、会寧高等女学校教諭の傍ら会寧商業学校教諭を兼務した（地歴担当）。会寧高女と会寧商業は、教員人事上相互補完の関係にあったのである。加藤浄は、その後1939年、同じ咸鏡北道内の羅津高等女学校に移り、足掛け4年の羅津生活を経て全羅南道に異動、光州旭高等女学校教諭として敗戦を迎えた。

小西理明は、京城帝国大学を卒業し、中等学校教員として元山商業学校（1930～35年度）、会寧商業学校（1936～38年度、37年度から教頭）、会寧高等女学校（1939～41年度、教頭）、新義州中学校（1941～44年度、講師）、清州第一中学校（1944～45年度、教頭）という経歴をたどった。元山商業から会寧商業に移るいきさつについては小西自身、「渡植先生は私が元山商業を追われた時拾い上げて下さいました」³³⁾と述べている。また、会寧商業から会寧高女へ

の小西の異動をめぐる渡植校長と亀田校長（文中の「私」）の交渉経過は次のとおりであったという。

（亀田の校長就任から一稲葉註）一年が過ぎ新たに一年生を迎えることになった時、萩尾先生の転出があった。この件については商業校長の渡植先生から私に次のような申込みがあった。

「本校教頭の小西理明先生は同僚との折れ合いがうまくゆかないで困っている。そちらの高女に引き取って貰いたい。貴君ならば小西君を円満に勤務させられるであろう。萩尾先生は元の羅南中学に復帰させることにして本人の了解も得ている。」

私はこの申出は甚だ不服であったが、萩尾先生が田舎の女学校に長くいては専門の学科の研究も出来ず転出を希望されるというならば致し方もないとこれを承諾して小西先生を新しい教頭として迎えたのである。³⁴⁾

会寧高女以降の亀田喜三郎と小西理明の関係について、亀田の記すところは次のとおりである。

小西理明先生は京城大学の出身で非凡な方であった。…（中略）…しかし非凡にあり勝ちの圭角があり、為に商業で同僚との和を欠いたのである。それが会寧（高女一稲葉註）に移ってからは私を信頼してくれ、教頭としての手腕を十分に発揮し、先生方との仲も円満で申し分のない協力者であった。ところが私が羅南に去って後に後任の校長さんとは意見が合わず、遂に大喧嘩をして誅首されるという古今未曾有ともいうべき大事となった。私は一ノ瀬視学官が新義州中学校長になっていたのに依頼して講師に採用して貰い、後私が清州第一中学校長になった時教頭として招聘し、敗戦引揚まで一緒であった。私とはよくよく緑の深い先生であった。

³⁵⁾

小西は、戦後 30 年以上を経た 1978 年当時、「私が元山商業を追われ、また一生でもいたかった会寧高女を追われた原因や理由は私には今もってわかりません」³⁶⁾と述べているが、会寧高等女学校を依頼免となったのが 1941 年 8 月 29 日、清州第一中学校教諭となったのが 1944 年 9 月 1 日といずれも年度途中であったことが、小西の異動理由が尋常でなかったことを窺わせる。

濱田正行は、1907 年愛媛県大三島に生まれ、亀田喜三郎が代用教員をしていた大三島小学校に学んだ。その後愛媛県師範学校と日本体育会体操学校（現 日本体育大学）を卒業、横浜の女子師範学校や浜松・大津の高等女学校に勤務した。そして 1939 年、亀田によって会寧高等女学校にスカウトされたのである。亀田は、「浜田正行君は私の教子で内地に居たのを強引に説伏して引っ張って来た。体操が専門で技術は卓絶しており、特に学校ダンスでは一家を成していたのである」³⁷⁾と述べている。会寧高等女学校に続いて羅南高等女学校と清州第一中学校でも、濱田は亀田校長に仕えた。

濱田と同じく 1939 年、亀田のスカウトに応じて京城第一高女（在任 1931～38 年度）から

会寧高女の教諭となったのが中西初枝である。亀田によれば、「中西先生は京城第一高等女学校の家事科の主任であった。夫君が軍医で、会寧の部隊に転属になったので退職して会寧に来られたのを私が懇望して会女に来て戴いた」³⁸⁾という。

片岡（当時中田）久美も、専門学校在学中の 1939 年春、教諭・舎監として就任することを要請された。「卒業を前の私は亀田先生から、巻紙に毛筆の長いお手紙を頂戴いたしました。何のわきまえもない私への御丁寧なお手紙に感動し、それまでの就職への迷いが消えて国境の町会寧へ赴くことを決意したのでした」³⁹⁾と述懐している。

客殿賢は、1939 年 3 月、國学院大学を卒業した。日中戦争勃発後の殺伐とした東京生活に嫌気がさし、朝鮮に渡って会寧高等女学校教諭となるまでのいきさつは次のとおりである。（ただ、客殿の教員生活は、応召のため 1 年足らずに終わった。）

東京は急変しはじめていた。そして殺伐とした軍事色と、味けないビジネス社会と、ただれた夜の社会が、大都会というつぼの中で三つ巴になって、渦巻いているようにさえ思えた。私はもうこうした息づまるような都市生活には魅力がなくなり、大陸のような広々した所で、心にのびのびしたゆとりがもてる生活がしたい気持が、強く湧き出していた。

そうしたことから卒業前になって、外地就職を希望し、就職先を未知の朝鮮に求めた。そして朝鮮総督府の要職にあった知人に就職の斡旋を依頼した。その結果、京城女子師範、元山商業、及び会寧高女の三つが紹介された。そこで私は単身で身軽であったことから、一番遠方の地へ就職し、転勤により逐次南下して、内地へ戻った上で、最後は出身地（和歌山一稲葉註）へ帰えるコースを想定して、会寧高等女学校を選ぶことにした。⁴⁰⁾

関福太郎の朝鮮渡航理由も、客殿賢のそれと似たようなものだったようである。次女綾子（会寧高女 3 回生）が、「父が昭和十四年朝鮮へ渡りましたのも一つには日支事変が始まり、おいおい息苦しくなりそうな気配を感じたからということもありましょう。まだ見知らぬ大陸には、父の夢が根を下す場所があるように思えたのでしょう」⁴¹⁾と推測している。関は、1939（昭和 14）年、取り敢えず会寧東尋常小学校の訓導となったが、1 年後、会寧高等女学校教諭となり、東洋音楽学校卒の経歴を活かして会寧高女の終焉まで音楽教育に専念した。ある卒業生の回想記に、「会寧高女の教育は素晴しかった。教育程度も当時の女学校では最高だったわ。父の関係で何回か転校したけどいつも実感していた。特にあの当時音楽でコールユブングン（Chorübungen 唱歌練習用の教科書—稲葉註）まで教えていた学校なんてなかったわ」⁴²⁾とある。

塚越龍生は、1916 年会寧に生まれ、会寧尋常高等小学校～羅南中学校を出た。ちなみに羅南中では、萩尾三八に国語を学んだ。その後暫く満州で暮らしたが、やがて「満洲に絶望し、見切をつけ」⁴³⁾て会寧高等女学校教諭となった。母の勧めと関根十七司校長の斡旋による転職であった。会寧高女在任は、1941 年 9 月から 45 年 6 月の応召までであった。

三. 会寧高等女学校の学校文化

会寧高等女学校の学校文化の特色として、まず、中学校のない会寧邑でそれなりの威信を築いていた会寧商業学校（1920 年 6 月開設）との密接な関係を挙げることができる。高等女学校創設時の校長を近隣中等学校の校長が兼任することは、当時の朝鮮において珍しいことではなかったが、教諭 5 名中の 2 名（藤沢徹男・大藪静夫）も兼任という例は珍しい。のみならず、逆に会寧高女教諭加藤浄は会寧商業教諭を兼任し、また小西理明は、会寧高女第 2 代校長亀田喜三郎をいわば身元引受人として会寧商業教頭から会寧高女教頭に異動した。

このように両校間には教員人事上の連携プレーが見られたが、生徒間にも「暗黙の連帯感」というべきものがあつたようである。会寧高等女学校 5 回生のひとりは、1944 年秋の思い出を次のように記している。男女中等学校生徒間の連帯は、当時としては極めて特異な現象である。

四年生の秋、会寧郡の女学校対抗で選手として体力章検定の種目を中心に争った。隣接する商業学校の運動場を借りてだった。窓から商業生が（顔を一稲葉註）だして「おう、我妻、頑張れよー。」と声援をおくってくれた。総合で会高女が優勝したと思うが、この辺の記憶がない。日頃は商業生と顔があつても一言も口をきかないが、こんな時は特別で、声をかけられても違和感がないのは不思議。スケート会の競技場でも、コースの外にいた商業生が「会寧ガンバレー。」と手を振ってくれた。勿論、商業生の滑っている時には、「会寧ガンバレー。」と応援したっけ。⁴⁴⁾

次に会寧高等女学校の「内鮮共学」の状況を見てみよう。手元の『朝鮮諸学校一覧』によれば、会寧高等女学校の各年度 5 月末現在の生徒数は次表のとおりである。

年 度	1937	1938	1940	1941	1942	1943
内地人	48	82	131	112	102	111
朝鮮人	7	27	81	92	100	102
計	55	109	212	204	202	213

初年度（1937 年）の新入生 55 名中には僅か 7 名（12.7%）の朝鮮人しか含まれていなかったが、その比率は学年進行とともに高まり、4 学年が揃った 1940 年には 38.2%（212 名中 81 名）となった。そして 1941 年以降は、「生徒の中には半数近い朝鮮人の娘さんが在学しており他に類例の少ない共学の学園でした」⁴⁵⁾という状況だったのである。朝鮮人生徒のほとんどは上流階層の出身で、1940 年の創氏改名以後は日本名を名乗った。（それゆえに彼女らは、民族解放後の北朝鮮において、ブルジョア・親日派として二重に弾圧されることになる。）

参考までに教員の民族構成を見ると、会寧高等女学校の朝鮮人教員は、管見の限り 1943 年

に就任した宋恭鏞（日本名大原恭鏞）が唯一の存在であった。

朝鮮語・朝鮮文化への対応に関しては、相矛盾するふたつの証言がある。時期的には、前者が1943年冬、後者が1945年3月である。

朝鮮語は使用厳禁だった。私は何かのときに「アイゴー」といったところに天本先生が入っていらして「今アイゴーといったのはダレダ！」かくて厳寒の校庭を三周走る罰を受けた。息をはずませて走るばかり、母国語を禁じられた民族のいたみに深く思いを致すこともなかった。

「今に見ていらっしやい」とよくいていた色白の友。今思うといわれない差別がそこにあった。⁴⁶⁾

昭和二十年三月の卒業式それは関先生のクラスでしたか？五回生だったと思いますが式後お祝いの宴が開かれました。…（中略）…朝鮮の衣裳を着られてのアリランのおどり…とてもきれいで今でも私の眼裏にやきついて居ります。⁴⁷⁾

牽強付会的に辻褄を合わせれば、日常生活用語としての朝鮮語は厳禁であったが、非日常的なイベントでの朝鮮民謡や民族舞踊までは禁止されていなかったということであろうか。

会寧高等女学校の学校文化の最大の特色は、なんといっても軍隊との関連性である。軍隊との関連にはいろいろな側面があるが、まず指摘すべきは、会寧高等女学校を産み育てた諸勢力のひとつが軍だったことである。歩兵第75連隊の歴代連隊長をはじめとする多くの高級軍人が会寧高女生徒の保護者であったことが直接の要因であろう。それはともかく、入学式・卒業式などの学校行事には軍代表が必ず来賓として参列したこと、前述したように新キャンパスの運動場が工兵隊の協力によって整備されたこと、さらには新任教員の会寧駅到着を「軍の代表の方、邑の有力者の人々が揃って出迎へられた」⁴⁸⁾ことなどが軍との関連を象徴している。

会寧駐屯軍は、その家族中に教員適任者を有していたという意味で会寧高等女学校教諭の供給源でもあった。明らかかなところでは、山本やよひや前述した中西初枝がその実例である。山本は、1943年12月、関根校長の誘いに応じて教員となった経緯を次のように回顧している。

若い頃兄が航空隊の高級副官として会寧におりましたので、兄のサーバントとして北鮮に参りました。あの頃は先生になる事など考えておりませんでした。しかし会寧高女の校長先生がおいでになり幾回もお話し下さいましたので、ついに決心いたしました。⁴⁹⁾

高級軍人は、今日風に言えばいわゆる転勤族でもあったので、父親の異動に伴って生徒の転入・転出が頻繁なことが会寧高等女学校の大きな特色であった。「高級将校の令嬢が転校して来て女学校に内地の雰囲気を与えた」⁵⁰⁾というようなメリットもあったであろうが、頻繁な転入・転出は、生徒個人にとっても学校運営上もデメリットが大きかったであろう。極端な例として、「軍人であった父の転任で、女学校一年を、金沢県立第二高女、会寧公立高女、岩手県立一関高女と転々とした」⁵¹⁾者もいた。

軍との関連で学校運営上のデメリットといえば、軍の年中行事への参加や各部隊・陸軍病院などへの慰問活動は、往々にして授業時間に食い込むことがあった。次の引用は、1941 年当時のエピソードである。

軍旗祭に出場する日が近づくと、全校生は授業の一部がカットされて何度となく練習する。藤本先生が「他の授業でなくて、裁縫の時間ばかりが何故潰されるんでしょうかね。」とこぼされたのを憶えている。⁵²⁾

しかし、戦前の女学生、しかも軍都会寧の女学生として、会寧高女の生徒たちが軍との交流に積極的に参加したことは、同窓会誌掲載の多くの回想記が物語っている。

おわりに

会寧高等女学校は僅か 8 年余の短命に終わったが、そこにおける教育を関係者は一様に高く評価している。同窓会誌『ひまわり』における代表的発言を列挙すれば次のとおりである。

人種を越えて美しい融和を見つつあったものを敗戦によって袂を分つに至ったことは何とも痛恨の至りである。(第 2 代校長亀田喜三郎)⁵³⁾

開校以来創立者の地元邑民や二代の校長が心血を注いで育て上げた学園しかも鮮内で有数な内鮮一体の実の挙げた国境文化の殿堂ともいうべき吾が学園 (第 4 代校長村岡哲夫)⁵⁴⁾

私は卅八度線の彼方に向って叫びたいのです。又、朝鮮統治四十年を悪政とのみ罵ってしたり顔の一部の日本人評論家に言いたいのです。且て北鮮の会寧という小さな町に民族を越えた愛情を育てる教育をした小さな、しかし立派な女学校があったことを。(教諭塚越龍生)⁵⁵⁾

朝鮮のクラスメートとは非常に仲がよく全然意識もせずに四年間を過し今もなを、かわらぬ友情を温めあっております。(1 回生小島梅子)⁵⁶⁾

これらの発言に通底するのは、「内鮮一体」を是とする、少なくとも否定はしない民族観である。差別をしないという意味であくまでも善意ではあれ、そこに異民族の独自性を尊重する意識はない。卒業生の中には、遅蒔きながら「母国語を禁じられた民族のいたみに深く思いを致す」⁵⁷⁾向きもなくはないが、大勢にはなっていない。

1945 年 8 月 13 日夕、会寧からの苦難の逃避行が始まった。(日本軍および軍関係者は、8 日のソ連参戦を知るや逸早く引き揚げた。)ソ連軍の占領～北朝鮮共産主義政権下で日本人引き揚げ後の会寧高等女学校がどうなったか、知る術がない。「終戦後…(中略)…会寧高女は普興女学校と合併、普興女学校の校長が、会寧高女の校長になった。この校長は旧高女の生徒は

親日派だとして、ずいぶんつらく当たったらしい」⁵⁸⁾、「今（1987年—稲葉註）、会寧は、金日成の前妻の故里だそうで、母校の名を金貞淑高等学校と名付けたそうです。共産党の温床でせう」⁵⁹⁾といった断片的な情報があるだけである。

〔註〕

- 1) 会寧公立高等女学校同窓会会報『ひまわり』 第13号 1994年 p.34
- 2) 『学事及宗教要覧』 咸鏡北道 1931年 p.36
- 3) 『ひまわり』 第13号 p.35
- 4) 『朝鮮新聞』 1936年3月23日
- 5) 『朝鮮』 1939年4月号 p.3
- 6) 『釜山日報』 1935年10月10日
- 7) 『ひまわり』 第9号 1987年 p.6
- 8) 同 上 同 上 pp.7-9
- 9) 同 上 第2号 1974年 p.6
- 10) 同 上 第6号 1978年 p.10
- 11) 同 上 第9号 p.9
- 12) 同 上 第13号 p.36
- 13) 同 上 第8号 1984年 p.11
- 14) 同 上 第10号 1989年 p.47
- 15) 同 上 第5号 1977年 p.14
- 16) 同 上 第8号 p.39
- 17) 同 上 第2号 p.8
- 18) 同 上 第5号 p.17
- 19) 同 上 第8号 p.42
- 20) 渡植の生涯については『渡植彦太郎先生 追悼』（渡植彦太郎先生追悼文集発行委員会 1993年 非売品）に詳しい。
- 21) 『ひまわり』 第10号 p.16
- 22) 『景福五十五年史』 景福同窓会 1976年 pp.110-111
- 23) 『ひまわり』 第9号 p.6
- 24) 同 上 第5号 p.18
- 25) 同 上 第9号 p.11
- 26) 塚越龍生が関根十七司校長の勧誘に応じて会寧高等女学校教諭となったことは、2006年9月1日、塚越氏本人との電話インタビューによって確認した。
- 27) 『ひまわり』 第8号 p.42
- 28) 同 上 第9号 p.7
- 29) 同 上 第2号 p.7
- 30) 同 上 第4号 1976年 p.34
- 31) 「朝鮮総督府官報」 第5336号 1944年11月16日
- 32) 『ひまわり』 第13号 p.34
- 33) 同 上 第6号 p.5
- 34) 同 上 第9号 p.10
- 35) 同 上 同 上 pp.10-11
- 36) 同 上 第6号 p.5
- 37) 同 上 第9号 p.8
- 38) 同 上 同 上 pp.7-8
- 39) 同 上 第12号 p.47
- 40) 同 上 第11号 1990年 p.32

- 41) 同 上 第 6 号 p.39
- 42) 同 上 第 12 号 pp.41-42
- 43) 同 上 第 3 号別冊 1974 年 p.7
- 44) 同 上 第 15 号 1999 年 p.39
- 45) 同 上 第 2 号 p.7
- 46) 同 上 第 10 号 p.52
- 47) 同 上 第 6 号 p.15
- 48) 同 上 同 上 p.9
- 49) 同 上 第 10 号 p.37 なお日付（1943 年 12 月 3 日）の確認は、2006 年 9 月 7 日の山
本やよひ氏との電話インタビューによった。
- 50) 『ひまわり』 第 9 号 p.10
- 51) 同 上 第 10 号 p.52
- 52) 同 上 第 15 号 p.39
- 53) 同 上 第 9 号 p.11
- 54) 同 上 第 2 号 p.9
- 55) 同 上 第 6 号 p.13
- 56) 同 上 第 2 号 p.5
- 57) 同 上 第 10 号 p.52
- 58) 同 上 第 8 号 p.21
- 59) 同 上 第 9 号 p.32

The Kainei Higher Girls' School:
A *Naichijin* School in Colonial Korea

Tsugio Inaba

Kainei (K. Hoeryông) is located in the northeastern corner of the Korean Peninsula, sharing the Tuman River with Manchuria. Though a small town, it was regarded as a point of strategic importance by the Japanese army, and had become a “military city” in 1915, when an expanded number of troops were deployed there.

The Kainei Higher Girls' School, established in April 1937, was the northernmost of all the middle schools for *naichijin* (Japanese living in colonial territories) in colonial Korea. Despite its small size, with one class for each grade, and being open for only eight years, the school stood out for its unique culture. The uniqueness of the school was based upon its location in the “military city” and its major premise of *naisen kyôgaku*, or coeducation of the Japanese and the Koreans.

The deep relationship between the school and the military is demonstrated in the fact that many of its students were daughters of the military personnel stationed in Kainei. Due to the fathers' transfers, the school had a high turnover of students. The military-oriented character of the school was also obvious in its ceremonies, which military officers attended as guests of honor, and in its students' active participation in military events and the activities to encourage soldiers.

In the inaugural year of the Kainei Higher Girls' School, seven of its fifty-five students were Koreans, or 12.7 percent of the student body. The ratio of the Korean students increased over time: 38.2 percent in 1940, when the school had students for every grade for the first time, and one-half of the student body after 1941. The school is regarded as the most successful case of *naisen kyôgaku*.

Its Korean students, mostly from upper class families, were later doubly oppressed under the communist rule of North Korea both as bourgeois and as pro-Japanese.